

はじめに

共感の川が流れる状況づくりへ

「あなたの思い出を分けてくださいー昔の写真募集中」。これは、今年のグランプリの一つの国土交通省天竜川工事事務所のプロジェクトと同じ表現だ。今、行われている「世界子ども水フォーラム・京都」では、「川の日」ワークショップで価値づけられた新手法が早くも活用されていることに驚きを感じる。

このワークショップのグランプリは、“いい川”“いい川づくり”の新しい価値を発見・実践・表現しているところに見定められている。過去の4回全てがそうであり、今年は、格別に優れた新しい価値づくりのものが勢ぞろいして、結果的にグランプリ3つ、準グランプリ3つということになった。

天竜川プロジェクトは、思い出の写真収集によって人と川の寄り添いあう生活文化の豊かさへの気づきと、今後時をかけてそれを深く多面的に洞察することの必要性と可能性を提起した。それは、単なる記録よりも記憶という人間の生きる価値の根源的な位相（移送）を示していることに意義がある。

筑後川プロジェクトは、「流域まるごと博物館」という創造的構想と、その実践の若い担い手が、広松伝さんの霊を受け継いでいることを鮮やかに示してくれた。

寝屋川プロジェクトは、大都市圏の密集市街地を流れる、人々からすっきり見放された川に対して、親も子も遊び心いっぱいの多面的関わりによる川の再生プロセスの物語が表現された。

これらはすでにして、過去の経験にあったものではなく、それぞれ私たちの時代の川をめぐる活動と価値と技術の最前線＝フロンティアを敢然と拓く誠に新鮮な方法である。

と、思いつつも、一方では今年の本審査会の波乱と批判の声には素直に、リフレクティブに、自省的に捉えなければと思う。三次審査では、フロアから「一次審査で十分に評価されたものが落ちていき、一次で評価されなかったものが最終的に高く評価されるのは腑に落ちない」の意の発言が続いた。これは「すでにして」前日議論を重ねたものが「勝ち」に結びつくことの予想に反して、審査の過程であらぬ方向へいくことへの不満の表れであった。

ところで、レフェリーは今までの蓄積の上にたって“いい川”“いい川づくり”の評価のものさしめいたものをそれぞれ胸にいだきつつも、かといって、予め周到な準備をするなどということはありません。審査員は「素手にして」議論の応答の流れに沿いつつ、新しい「価値」の相互発見に身を乗り出しつつ、着地点、合流点をうかがうのである。当日の会場には2つの発想のズレが生じていた。

「すでにして」「勝ち」にこだわる、がひとつ。

「素手にして」「価値」にこだわる、がもうひとつ。

「川の日」ワークショップでは何を指すのかについての、「すでにして 勝ち」をめぐる基本的態度、スタンスの違いが、当日会場での対立と葛藤を呼んだ。しかし、トラブルはエネルギーに変えよう。対立を力に変えよう。そうした前進的視点から、今年の問題を乗り越える審査・運営のやり方を来年に向けて改善していこう。

その際のポイントは、2つある。ひとつは、「審査」とか「グランプリ」とかの「勝ち負け」意識を誘発する言葉とやり方の再考。いまひとつは、最終段階の判定において、新しい価値の発見とそれを意味づける議論の深化により、評価の内容と最終判断において、参加者間全体に共感の川が流れる状況づくりである。

来年が楽しみである。

千葉大学工学部都市環境システム学科教授
「川の日」ワークショップ・総合コーディネーター
延藤 安弘